

道綱母「嘆きつつひとりぬる夜」歌の詠作事情

今西，祐一郎

九州大学大学院人文科学研究院文学部門国語学国文学講座：教授：国文学

<https://doi.org/10.15017/1170>

出版情報：文學研究. 98, pp.1-15, 2001-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：



道綱母「嘆きつつひとりぬる夜」歌の詠作事情

今 西 祐 一 郎

—

嘆きつつひとり寝る夜のあるまはいかに久しきものとかはしる

の歌が、道綱母の歌のなかで飛び抜けて有名なのは、それが『百人一首』に収められているからである。とはいえ、『百人一首』による評判は鎌倉時代以後のこと。『百人一首』での評価を待つまでもなく、この歌は平安時代にすでに秀歌として名高かった。むしろ藤原定家はそのような古来の評価を踏まえて、この歌を『百人一首』に選び入れたのである。

この歌がはやくからいかに高い評価を得ていたかは、まずそれが勅撰和歌集『拾遺抄』、『拾遺集』にともに採られていることから窺い知られる。

入道摂政（の）まかりたりけるに、門をおそくあけ（はべり）ければ、

たちわづらひぬといひいれて侍りければ(るに)

右大将道綱母

なげきつつひとりぬる夜のあるまはいかに久しきものとかはしる

()内は『抄』の本文

〔拾遺集〕恋四 九二二、〔拾遺抄〕恋上 二六八

のみならず『拾遺集』の撰者と目される藤原公任は、みずから編んだ秀歌合わせ『前十五番歌合』において、この歌を「帥殿母上」すなわち藤原伊周の母高階貴子の「忘れじの行く末までは難ければ今日を限りの命ともがな」と並べる(この配列は『百人一首』と同じである)と同時に、「わが心にかなへる歌一卷をあつめて、深き窓にかくす集といへり」(『後拾遺集』序)といわれた『深窓秘抄』にもこの一首を加えた。

少し時代が下って、能因の手になる秀歌撰『玄玄集』でも、「大入道殿、よべなどかおそくあけ給はざりしとの給はせたりければ、御返事」の詞書(ただし、この詞書には問題がある。後述)のもとに収められ、この道綱母歌の評価は一貫して高い。

加えて、この歌は、たんに歌の出来映えだけでなく、その詠まれた場面が歌語りのように語り伝えられていた。『大鏡』は、兼家の子息を語って道綱に及ぶ際、道綱母について次のように筆を費やしている。

この母君、きはめたる和歌の上手にておはしければ、この殿のかよはせ給ひけるほどのこと、歌など書き集めて、「かげろふの日記」と名づけて、世にひろめ給へり。殿のおはしましたりけるに、門をおそくあけたりければ、たびく御消息いひいれさせたまふに、女君、

なげきつゝひとりぬるよのあるまはいかにひさしきものとかはしる

いと興ありとおほしめして、

げにやげに冬の夜ならぬまきの戸もおそくあくるはくるしかりけり

さればその腹の君ぞかし。

ここでは秀歌として誉れ高かった道綱母の歌に加えて、兼家の返歌も記される。この兼家の返歌は、『大鏡』以前には『かげろふ日記』にしか見えない歌で、とすれば『大鏡』の記事に『日記』が関わりを持つであろうことは十分考えられる。というよりも、それ以外には考えられないといえるかもしれない。『かげろふ日記』のその箇所は次の通りである。

……二三日ばかりありて、あか月がたに門をたたくときあり。さなめりと思ふに、憂くてあけさせねば、例の家とおぼしきところにもものしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

なげきつつひとりぬるよのあくるまはいかにひさしきものとかはしる

と、例よりはひきつくろひて書いて、うつろひたる菊にさしたり。返りごと、

あくるまでも心みむとしつれど、とみなる召使の来あひたりつればなん。いとことわりなりつるは。

げにやげに冬の夜ならぬまきの戸もおそくあくるはわびしかりけり

しかし、事柄は単純ではない。なぜならば、『拾遺集』や『大鏡』が道綱母歌を、訪れた兼家の「門を開けよ」という催促に応じて詠み出した歌と受け取れる書き方をしているのに対し、『かげろふ日記』では、その歌を門を開けないままに兼家を追い帰した道綱母の方から、翌朝になって詠み送った歌と記しているからである。すなわち前者では当座、あるいは即座の詠と受け取るのが自然な状況であり、後者では一晩おいた翌朝の詠、ということになる。

「拾遺集にはその夜の贈答のやうに書きたれど、蜻蛉日記を見れば翌朝の贈答なり」（百人一首一夕話）。

この食い違いはどこで発生したのか。そしてまた、どちらが実際であったのか。

今日、恐らくはもっとも広く読まれている『百人一首』の解説書である、島津忠夫氏の角川文庫『百人一首』は、この点につき次のように述べる。

『拾遺集』と『蜻蛉日記』とでその作歌事情を異にする。真意はまさしく日記にあるごとくで、一子道綱が生まれてまもなく、町小路の女に通いはじめた兼家に激昂した作者が、二、三日して訪れ、門をたたく兼家に対して迎え入れることを拒んだ翌朝、ことさらに「うつろひたる菊」にさして、送ったというのである。

『かげろふ日記』の記載が事実で、『拾遺集』の詞書はそうではない、ということである。

ところがその逆、すなわち『拾遺集』の方が事実で『かげろふ日記』は事実を歪めた記述だという大胆な指摘が、江戸時代の『百人一首』注釈書に見出される。それは香川景樹の『百首異見』である。

二

景樹は言う。

蜻蛉日記に、此門たゞき給へる事を、つひに明ずしかへしまゐらせて、明るあしたこなたよりよみてつかはせしやうに書るはひが事也。

と。その理由は、

「ひとりぬるよの明る間は」といひ、「いかに久しき」といへるは、門あくるあひだの遅きを、侘び給ひしくらべたる也。つひに明ずしてやみたらんには、何にあたりてか、明るまはとも、久しきともよみ出べき。此哥の返し、「げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸もおそく明るはわびしかりけり」とあり。此おそく明るはとあるにも、明て入奉しこといちしるし。

だからであるという。

『かげろふ日記』の記事を、訪れた兼家が何の消息も言い入れないまま帰ってしまい、翌朝になって道綱母が腹を立てて歌を詠み送ったと解するならば（そして、現在『かげろふ日記』はおおむねそのように読まれているようであるが）、その歌「嘆きつつ……」には景樹の指摘するような問題点がたしかにある。

『拾遺集』では、道綱母歌が、兼家の「たちわづらひぬ」という抗議に応じて詠み出された巧みな切り返しとなっているのに対し、『日記』では憤懣やるかたない道綱母の一人相撲のような歌となって、「ひとりぬる夜をあくるま」「いかに久しき」という秀句が宙に浮く気味がないでもないからである。

景樹がいうように、『かげろふ日記』の記事は事実と相違した「ひが事」なのであろうか。

景樹の説をも視野にいれつつ、この問題をさまざま資料を駆使して正面から取り上げた論文がある。坂本信男氏「道綱母「嘆きつつ」詠歌の受容―解釈と再検討―」（立教大学「日本文学」四九号、昭和五七年一二月）で、本稿も氏の論に多くを負うものである。^(注)

氏は『拾遺集』の詞書等から窺える「門を開けるのが遅いと言っている兼家に作者が歌を差し出すという状況」

と、兼家が帰っていった翌朝に歌を言い送ったという『かげろふ日記』の記述との違いについて、一見相反する両者の間には、実は本質的な違いはないのではないか、という。

氏は『拾遺集』詞書の「おそくあければ」という言い回しに焦点を絞り、岡崎正継氏の論文「御導師遅く参りければ」の解釈をめぐって（『今泉忠義博士古稀記念国語学論叢』、昭和四八年）を援用しつつ、次のような論を展開する。すなわち、「おそくあける」とは「遅くなった」けれども「開けた」という肯定命題ではなく、「なかなか開けなかった」という否定命題を表す言い方である、したがって『拾遺集』詞書においても道綱母は門を開けず兼家を帰したという意に解することが可能であり、そこに「日記の伝える詠歌事情の積極的な修正・変形は見られない」、つまりと両者の違いは本質的には存在しない、というのである。

これは、香川景樹とは異なった意味で大胆かつ興味深い見解である。言われてみれば「おそくくする」という表現は従来の解釈の死角であった。そこに注目した坂本氏の論は斬新である。しかし、『拾遺集』詞書と『かげろふ日記』との同一性を性急に立証しようとするあまり、氏が『拾遺集』詞書の「いひいれて侍りけるに」の助詞「て」に過重な意味を期待したきらいのある点は再考を要する。

氏は、『拾遺集』詞書「立ちわづらひぬといひ入れて侍りけるに」について、それを、

「立ちくたびれてしまったと申し入れましたところ」と解すると、兼家が案内を申し入れた時即座に作者が応じて歌を出したという場面が構成されることになる。この点、拾遺抄の記述は蜻蛉日記と場面構成が異なることになる。

と、従来の解釈をまず提示し、しかし、詞書の「侍り」の上に「て」があることを取り上げて、

補助動詞「侍り」は「て」に接して本来の存在の意をなお保ち、その動作（状態）の存続を添え表わす機能を残していると考えられる。これを考慮すると、この文は「立ちくたびれてしまったと申し入れておりましたところ（申し入れた状態でありましたところ）」と解釈できる。とするとこの表現は必ずしも女の家に案内を請うて其処で即座に歌が返されたという場面を構成しないと思われる。言い入れた状態でそれが継続している故に、「言い入れておいたところ（ソノ後送ラレテキタ歌）」という事態・内容を含みうる表現と考える。つまり、拾遺抄の表現は、蜻蛉日記において描かれているいきさつと相矛盾した要素をもたないと言つてよいと思われる。と述べる。

だが、助詞「て」が「動作（状態）の存続を添え表わす」からといって、その一字の追加で即座の返歌が翌朝の贈歌に変わりうるであろうか。氏の解釈は、助詞「て」の機能を重視しすぎて、いささか強引である。助詞「て」が必ずしも坂本氏のいうような役割を果たすとは限らないことは、たとえば次のような「言ひ入れて侍り」の例を見ればわかるであろう。

秋のころほひ、ある所に、女どものあまた簾の内に侍りけるに、

男の、歌の本を言ひ入れて侍りければ、末は内より

よみ人しらず

白露のおきにあまたの声すれば 花の色々ありと知らなん

（後撰集 二九三）

男など侍らずして年ごろ山里にこもり侍りける女を、昔あひ知りて
侍りける人、道まかりけるついでに、「ひさしう聞こえざりつるを、

こゝなりけり」と言ひ入れて侍りければ

土佐

朝なけに世のうきことをしのびつつながめせしまに年はへにけり

(後撰集 一一七四)

参議玄上が妻の、月の明き夜、門の前をわたるとて、

消息いひ入れて侍りければ

伊勢

雲井にてあひ語らはぬ月だにも我が宿すぎてゆく時はなし

(拾遺集 四三七)

これらの「言ひ入れて侍り」に対する応答歌は、「と(疾)きをこそ、かかるおりには」(源氏物語・橋姫)という場合で、いずれも即座の詠、もしくはそれに準ずるものと見なすのが自然であろう。就中、『後撰集』二九三番歌は連歌であり、末の句は間髪を置かず詠み出されたと考えてもおかしくはない。つまり、これらの例は、『拾遺集』の道綱母歌を従来解釈のように兼家の「立ちわづらひぬ」という「言ひ入れ」の時点からあまり間を置かず詠まれた歌と受け取ることを妨げるものではない。

また前掲『後撰集』、『拾遺集』の「言ひ入れて侍り」の中には、伝本によって「て」のない「言ひ入れ侍り」となるものもあり、また今日流布の定家本の「言ひ入れ侍り」が他本で「言ひ入れて侍り」となる例などもあって、「言ひ入れて侍り」という表現そのものが、判断の根拠とするには多分に不安定な材料である。

かれこれ考え合わせると、「て」一字の有無だけに頼って歌の詠まれた時点を判定しようとするのは無理が過ぎるというべきであろう。ただし、このことは坂本氏の説の無効をただちに意味するものではない。

詠歌事情の違いが指摘されてきた『拾遺集』（以下、『大鏡』に至るまで）と『かげろふ日記』とを、もう一度見較べてみよう。すると、『拾遺集』の詞書が一点の曇りもなく明瞭であるのに対して、『かげろふ日記』の記す詠歌事情には一抹の不審がただよう。といつても、それは『かげろふ日記』の本文だけを眺めていて看取できるような不審ではない。

問題は、『拾遺集』の詞書にはなく『かげろふ日記』本文にはある記述、すなわち「門をたたく」ということにかかわる。

男が女のもとを訪れて「門をたたく」ということは、おそらく平安時代の日常茶飯事であった。そして『かげろふ日記』が伝えるような、門をたたいたけれども開けてもらえなかったという例も珍しくはなかったはずである。

女のもとにまかりたりけるに、門を鎖してあけざりければ、

まかり帰りてあしたにつかはしける

兼輔朝臣

秋の夜の草のとぎしのわびしきはあくれどあけぬものにぞありける

返し

よみ人しらず

いふからにつらさぞまさる秋の夜の草のとぎしにさはるべしやは

（後撰集 恋五 八九九、九〇〇）

これは『かげろふ日記』の記事と「やや似た場合」の「門前払い」の例として柿本奨『蜻蛉日記全注釈』に挙げられた歌であるが、同書はさらに次のような類似例を指摘している。

男の、物など言ひつかはしける女の田舎の家にまかりて、
たたきけれども聞きつけずやありけん、門もあけずなり
にければ、田のほとりに蛙の鳴きけるを聞きて

あしひきの山田のそほづうちわびてひとりかへるのねをぞ泣きぬる

(後撰集 恋四 八〇六)

おなじ人、女のもとにきて門をたたきけるに、あけざり
ければ、かへりて、あしたにうらみたりければ、女
たづぬべき人もおぼえぬわが門をよるはむぐらのねこそさすらめ

かへし、をとこ

草葉だに心あるらし八重葎いる人わきてねやのとぎせば

といひて来けるに、戸なほかたかりければ

この世にはつきしもはてじ思ふこといのちのちはいつかたゆべき

(小大君集 六九〇七二)

おなじころいきてたたくに、あけねば、をとこ

しのめのあけざりしかば夜もすがらまきの戸よりは立ち帰りにし

返し

夏の夜もまきの板戸もいたづらにあけてくやくもおもほゆるかな

(信明集 一〇五、六)

類例はさらに追加できる。

しのびたりけるところのかどをたたきけれど、あけざりければ、帰りてつとめて

おぼつかなまだあけぬよの月をみてあまのとばかりながめられしか

(実方集 一五六)

おなじころ、月のあかきに、人のもとにいきて門をたたくに、車にのりながら琵琶をひくを聞きながら、つひにあけねば、つとめて

花の夜の月にしらべし琴のねのあはれをしれる人ぞなかりし

(輔親集 九二)

かどたたきわづらひてかへりにける人の、つとめて
世とともにあらし風ふく西の海もいそべに波はよせずとや見し
とうらみたりけるかへりごと

かへりてはおもひしりぬや岩かどにうきてよりける岸のあだなみ

(紫式部集 四九、五〇)

むすめのかたに、夜ふけて門たたく人のありしを、
あけねばつとめて、をとこ

さらでまつ人をばしらで八重葎心かなくなたたきけるかな

かへし、かはりて

八重葎さしはへてやは来たりけむ門あくからにくくもあるかな

(赤染衛門集 三七四、五)

列挙した例には、いずれも『かげろふ日記』と同様、男の「門たたき」に対して門を開けない女が登場する。しかし『かげろふ日記』にはそれらとは決定的に異なる一点がある。それはさきに述べたように『かげろふ日記』だけを眺めていたのでは浮かび上がってこない。列挙した例と対比させたとき、はじめて見えてくるのである。それは何か。

四

男が訪れ門をたたき、しかし女は門を開けない——場面はそのあとどう展開するのであろうか。前節に掲げた多くの例は、例外なくまず男の側からのはたらきかけがあったことを教えてくれる。それは、最初に挙げた『後撰集』兼輔歌のように歌の場合もあれば、『小大君集』のように「恨み言」の場合もある。が、いずれにせよ、やり取りの口火を切るのは門を開けてもらえなかった男の方であった。兼家がまず「立ちわづらひぬ」という言を発したと記す『拾遺集』道綱母歌の詞書もその例にもれない。

それに対して『かげろふ日記』はどうであったか。兼家が門をたたき、しかし道綱母は「さなめりと思ふに憂くて開けさせ」なかった、すると兼家は新しい通い所町の小路に（というのは道綱母の思いこみかも知れないが）行ってしまふ。憤懣やるかたない道綱母は翌朝になって兼家に「嘆きつつ」の歌を詠み送った、というのである。

そこには門をたたいた後の兼家の動きが一切書かれていない。『かげろふ日記』が前節列挙の「門たたき」の諸例とは微妙に、しかし決定的に異なるのはこの点である。そしてそれは、兼家の前夜の「門たたき」に応じて翌朝詠まれたという道綱母歌成立のいきさつをかなり不自然なものにする。

従来の『かげろふ日記』読解は道綱母の心情に寄り添うことに熱心で、この不自然に関してあまり注意を払わ

なかった。

香川景樹のように、『かげろふ日記』が事実を歪めた「ひが事」を記したと断言するのは言い過ぎかもしれない。けれども道綱母がみずからの心情を述べるのに急なあまり、『日記』への記載を省いた兼家の動きがあったのではないかと、ということは考えられる。省略された兼家の動きとは何か。いうまでもなく門が開かない（あるいは開かなかった）ことへの兼家の抗議である。

前節に掲げた多くの事例に照らすまでもなく、道綱母邸の門をたたいた兼家が、門が開かなくて何も言わずに帰っていくはずはない。たとえ機嫌を損ねている道綱母の門を開けようとしないう強情が、町の小路に執心中の当夜の兼家にとってもつけの幸いであったとしても、愛想のひとつも言うのが当時の男たちがわきまえていた常識、礼儀である。兼家が無言のまま立ち去った、あるいは立ち去ったまま無言であった、という状況は考えがたい。その夜は言葉なく立ち去ったとしても、翌朝には一言なかるべからず、である。『かげろふ日記』は、その兼家の一言を記さなかったのではないか。

秋山虔・上村悦子・木村正中「蜻蛉日記注解」(六)は、『拾遺集』、『大鏡』と『かげろふ日記』との違いについて、

拾遺集・大鏡では「門をおそくあけければ」とあるのみで、その理由についていつさい触れておらず、逆に蜻蛉では何度も消息を遣つて門をあけてもらおうと務めている兼家の姿を描いていない。それは拾遺集や大鏡に、その撰者筆者によつてなされた事実の選択と修正があるからにはちがいないけれども、同時に蜻蛉もまた別の意味で事実が選択されているのである。

〔解釈と鑑賞〕昭和三七年十月

と述べる。

勅撰集の詞書が、詠歌のいきさつの記載に最大公約数的な抽象を施したものであろうことは、容易に想像できるが、それに劣らず日記というものにも、「注解」が指摘するように事実の変容がありうるということ忘れてはならない。近時、神野藤昭夫氏はさらに一歩進めて、現代の『百人一首』の注釈書が道綱母歌について『日記』の側にこそ、真の詠作事情が記されているとみることで大勢は決している」ことに疑問を挟み、

通説とは違って、「嘆きつつ」の歌をめぐる『日記』の叙述するところが事実であると考えなくともよいのではないか。むしろ『蜻蛉日記』がこのように書いていることに注目することによって、『日記』が表現しようとしたところを読みとることがだいじなのではないか。少なくとも、贈答歌における論理の整合性からいえば、事実は『拾遺集』や『大鏡』が伝える情報の方が事実に近いというべきである。

（「藤原道綱母―誇り高き才媛」、『解釈と鑑賞』平成十二年八月号）

と指摘した。

事実を探り知ることは必要な作業である。しかし、事柄は、事実であるという一点だけに意味があるとは限らない。事実の解明は、その結果事実からの逸脱であったことが判明した事柄に対しても、新たな、そして豊かな意味をもたらすのである。道綱母の「事実の選択と修正」（『蜻蛉日記注解』）、そして『蜻蛉日記』がこのように書いていること」（神野藤氏）から、『蜻蛉日記』本文の解釈は出発しなければならぬ。

（注）坂本氏の論文に先立って、木村正中氏「あけぬ真木の戸―蜻蛉日記の場面を中心に―」（『武蔵野文学』25・昭和五十二

年十二月)がある。本稿では論旨の輻輳を恐れて、坂本氏の論にのみ言及を絞った。

付記 歌集の引用は、すべて『新編国歌大観』による。

道綱母「嘆きつつひとりぬる夜」歌の詠作事情